Twinkle 東京女子医科大学学術リポジトリ
Tokyo Women's Medical University - Information & Knowledge Database
https://twinkle.repo.nii.ac.jp

Reduced pubertal growth in children with obesity regardless of pubertal timing

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-06-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉井, 啓介 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.20780/00032789

主 論 文 の 要 旨

Reduced pubertal growth in children with obesity regardless of pubertal timing
(肥満小児では思春期のタイミングに関係なく思春期の身長の伸びが低下する)

東京女子医科大学 小児科学教室
（指導：永田 智 教授）
吉井 啓介

Endocrine Journal 67(4): 477-484（2020 年 4 月 28 日発行）に掲載

【要 旨】

小児期の肥満は思春期の身長の伸びと思春期のタイミングの両者に影響を与える。一方、思春期のタイミング自体も思春期の身長の伸びに影響を与える。本研究では思春期のタイミングを考慮して小児肥満が思春期の身長の伸びに与える影響を検討した。13,649 名の児（男児 6,733 名、女児 6,916 名）を対象に、7 歳時 BMI Z スコアを基準として、痩せ群、正常群、肥満群の 3 群に分類した。7 歳時と 17 歳時身長 SDS の変化率（ΔHtSDS）を思春期の身長の伸びの指標、成長率ピーク年齢（ÂPHV）を思春期のタイミングの指標とし、7 歳時 BMI に基づいて分類した 3 群を説明変数、ÂPHV を媒介因子、ΔHtSDS を目的変数として媒介分析を行った。肥満群は痩せ群に比べて ΔHtSDS が男児で 1.23、女児で 1.17 低下、正常群に比べて男児で 0.87、女児で 0.85 低下していた。肥満群の低下する ΔHtSDS において、ÂPHV を介さない効果は男児では痩せ群と比較した場合は 68%、正常群と比較した場合は 71%、女児では痩せ群と比較した場合は 59%、正常群と比較した場合は 68%であった。小児肥満は思春期の身長の伸びの低下と関連していた。これは過去に海外で報告された結果と一致している。本研究では小児肥満が思春期の身長の伸びの低下に与える影響は思春期のタイミング介さない効果が介する効果によりも大きいことを初めて明らかにした。